

# Display and education of historical documents and records in the museum

NAGAMURA Yoshitomo  
The Museum of Kyoto

**Abstract** : This article explains the characteristics of recent displays of historical documents and records as well as the implementation of a workshop for elementary school students on them.

The exhibitions of historical documents and records at museums are required to be places for acquiring fundamental knowledge, like being able to read and understand similar materials encountered in different places. For this reason, the large-scale exhibitions held at various locations in 2013 and which comprehensively treated historical documents drew attention.

With the new national education policy in mind, I would like to introduce two practices that are intended to familiarize elementary school students with historical documents and records.

Taking Fujiwara no Michinaga's MIDOKANPAKUKI as a model, the children write a diary using GUTYUREKI (a kind of calendar used in pre modern era).

They write using a brush and the method of letter writing, of holding two sheets of paper in their hands (not placing them on a desk), used in the medieval period.

All of the anticipated aims were accomplished by vicariously experiencing past practices.

**Keywords** : museum, elementary schoolchild, workshop, GUTYUREKI (a kind of calendar used in pre modern era), how to write old letters

## 【研究論文】

# 博物館における古文書・古記録の展示と教育

(平成27年8月31日受付、平成27年10月20日受理)

京都府京都文化博物館 長村祥知

キーワード：博物館、小学生、参加体験型学習、具注暦、書状の書き方

## 序

筆者は、歴史・美術・映像を活動の三本柱とする公立博物館に勤務する学芸員である。個人研究としては、日本の平安時代後期～鎌倉時代の政治史や歴史叙述等を専門としているが、所属機関においては、そうした時代・分野での専門に限らず、歴史(特に日本古代・中世)担当として、文献資料を始めとする各種資料の調査・管理や歴史系展示の企画・運営に携わっている。

博物館法第一条に「この法律は、社会教育法の精神<sup>(マ)</sup>に基き」とあることから明らかに通り、博物館において教育は重要な活動と位置付けられており、展示は、青少年から社会人までの幅広い対象を念頭に置いた教育という要素を内包している。教育に特化した催事を行なう博物館も多く、筆者の所属機関でも愛称・通称<sup>(ぶんぼく)</sup>「文博」にちなむ各種の「ぶんぱく子ども教室」「ぶんぱく京都講座」を毎年数度開催し、さらに季節や展示主題に合わせた教育系催事を随時開催している。

本誌は教育に関する論考を掲載する学会誌ということで、日本の文化や伝統に関わる筆者にも投稿をお勧め頂いた。改善すべき点多々あるが、実物資料に向き合うことで専門研究に資する真理を見出し、その知見を幅広い人々にわかりやすく伝えたいという思いを抱いて日々悪戦苦闘している身として、試行錯誤の経験を書き残すことにも一定の意義はあろう。

本稿では、筆者の専門に深く関わる資料種別である文献資料、特に紙素材の古文書・古記録に関して、近年の展示で注目されること、および小学生を対象とする参加体験型学習の実践例を記しておきたい。なお、文献資料や古文書・古記録という場合、本来であれば木簡や金石文、布帛への書付なども含まれるが、本稿においては紙素材のものを指すこととする。

## 一 文献資料の展示と参加体験型学習

### 1 近年の展示の動向と今後の展望

文献資料は、絵画・彫刻や工芸品に比して見映えがせず、歴史系の展示の中でも考古遺物や民俗資料に比して特に地味である。それゆえに、集客や収益を厳しく問われる場合には、早くも企画段階で敬遠されたり出品数を減らしたりする傾向も強い。

もちろん、美術品としての書、すなわち書跡作品や料紙装飾の鑑賞に主眼を置いた展示も開催されており、京都国立博物館『展覧―天皇の書―』<sup>注1</sup> (二〇一二年)や東京国立博物館『和様の書』(二〇一三年)はその好例である。筆者が所属機関で次の展示の主担当をつとめた際も、芸術的関心が主であろう書道を学んでいる方から解説の依頼を受けた。

・「陽明文庫の名宝2 (天皇と関白の和歌)」<sup>注2</sup> (二〇一二年八月―十月)

・「鎌倉・室町 古筆の世界」(二〇一二年十月―十一月)

・「陽明文庫の名宝4 (古典の英華―『源氏物語』と古筆切)―」

(二〇一四年九月―十一月)

しかし、文献資料の中には、こうした美術品としての鑑賞に向かないものの方がはるかに多い。それにも関わらず、所有者・旧蔵者の名を冠した○○文書(これらの家わけ文書を指す場合の「文書」には古記録・古典籍を含む場合が多い)の展示は各地の歴史系博物館でしばしば開催されている。さまざまな視点からの文献資料の読解を通じて、それらを作成あるいは受領・書写・継承してきた地域や組織・家・個人の歴史を具体的に解明することが可能だからであり、文献資料の実物を管理・展示し、その読解の方法や調査の成果を来観者に「教育」という役割は、今後も歴史系博物館の重要な使命としてあり続けるに違いない。改めていうまでもなく、博物館の使命は集客や収益の論理だけでは割り切れないのである。

筆者もまた、幸いなことに所属機関で古文書を中心とした展示に携わる機会を得て、『八瀬童子―天皇と里人―』(二〇一二年十二月―翌年一月)の補助や、以下の展示の主担当をつとめた。

・「陽明文庫の名宝3 (『思い』を伝える―書状の美―)」(二〇一三年九月―十月)

・「細川家 永青文庫コレクション6 南北朝・室町時代の武家文書」

(二〇一四年二月―三月)

・「東寺百合文書―地域の記憶とその継承―」(二〇一四年四月―六月)

・『聖護院門跡の名宝―門跡と山伏の歴史―』<sup>注3</sup> (二〇一五年三月―五月)

いずれも会期中には、歴史学を学ぶ大学生や歴史に興味があると思われる社会人の来観が目立った。何人かからの反応を聞いた限りでは、次のような感想を得た。

① 釈文と現代語訳の双方が解説板として掲出されていてわかりやすかった。双方を掲出していないものについても、掲出してほしい。

② 「『である』調を用いて厳粛な雰囲気を出した大型解説パネルと、個々の文献資料の文章を「!」や「ですます」調を用いて柔和に現代語訳した小パネルの隔たりが面白かった。

③ 個々の資料だけではわからない基礎知識(古文書の書札札や、土地の権利移動とともに

に文書が残される仕組み、古典籍の装丁等)の解説があつて勉強になった。

④ 現代の書類行政に通じる昔の感覚がよくわかった。

⑤ 写真帳とは雰囲気の違い、ある展示品の厚さや料紙の大きさ、書風が他の展示品と見比べられてよかった。

文献資料について、個々の翻刻文や、それを現代語訳して得られる文章内容の理解(①②)はもちろんのこと、様式・機能や形態をも含めて多角的に理解したい(③④⑤)という来観者の期待・要望が窺える。

文献資料の実物を展示し、適切な解説を施すことでこそ、そうした要望に応えることができるのである。もちろん、質・量ともに充実した解説を準備する余裕はないことが多いが多く、多くの解説板を出せば出すほど展示品が埋没する嫌いもあるため、自ずと限度はあろうが、特に③の、個々の資料を越えて幅広く文献資料を読解するための基礎知識が得られる場を提供することが一つの目標となろう。例えば来観者が同種の資料を別の場所で見るときにも理解が及ぶような、本質に迫る解説が理想である。

そうしたことに注目したとき、二〇一三年度は、後年になって振り返れば、博物館における大規模古文書展示の画期と位置付けられる年になると思われる。古文書は、家わけ文書の展示以外では、ある人物や事件に焦点を当てた展示において、その一部を説明する資料として展示されることが多く、研究者には共有されている古文書学独得の約束事や古文書の歴史的展開を総体的に扱う展示がなされることは少なかった。しかし二〇一三年十月―十一月には、国立歴史民俗博物館『中世の古文書―機能と形―』<sup>注4</sup>と神奈川県立歴史博物館『こもんじょざんまい―鎌倉ゆかりの中世文書―』が開催され、年度末の二〇一四年三月―四月には大津市歴史博物館『湖都大津のこもんじょ学』<sup>注5</sup>が開催された。いずれも、家わけ文書にとどまらず、様式・機能・形態・伝来や地域性・現代的課題を踏まえて総合的に古文書学を楽しめる企画であり、各館が発行した同題の図録は今後の古文書展示の必読文献となろう。

従来こうした大規模展示がなされてこなかった一因には、集客・収益を見越した不安があつたと思われるが、文献資料に対する本質的な理解が要望されている中で、それに応えた各館の英断を高く評価したい。

## 2 文献資料の参加体験型学習

今日、各地の生涯学習施設で開催されている社会人向けの古文書講座は比較的人気が高いと聞が、小中学生に対する教育は如何であろうか。

平成二十三年度から小学校で全面实施され、平成二十四年度から中学校で全面实施された新学習指導要領で、社会科では小学校・中学校ともに博物館・郷土資料館等の活用が明記されるようになった。過去の人々が実際に使用していた資料の実物や、それらについての知識を体系化して展示している施設の活用が、学びを一層深めることはいまでもない。

特に歴史は暗記科目と揶揄されることも多いが、多種多様な史料の解釈を通じて真理に迫り、歴史像を描くという歴史学の営みの楽しさを伝えるためにも、史料からさまざまなことが読み取れるという体験をすることが、興味関心を養う重要な手だてとなろう。それは、個々の資料を越えて幅広く文献資料を読解するための基礎知識が得られる場を提供するという、既述の展示の目標にも通底する課題のほずである。

なお、「史料」という場合、一般的には活字化によって把握しうる文章・文字列を指すことが多いが、現装丁や料紙の大きさ・紙質・畳み方、あるいは筆跡・墨色といった、文献資料の実物が持つ形態面にも注目することで、それを管理・展示する博物館という場の利点を活かすことができよう。また、特に小学生の場合、知らない漢字や言葉が多いこともあり、文章・文字列から文献資料を学ぶには限界がある。

それらの点に留意して、小中学生が文献資料自体やそれらを記し伝えてきた人々を身近に感じ、さらなる興味・関心を涵養すべく、参加体験型学習を計画した。鍵となるのが、文献資料の作成・筆記に用いられていた和紙・筆・墨である。和紙・筆・墨は、現代において青少年はもちろんのこと、多くの社会人にとっても日常的に使用するものではないが、習字用半紙や筆ペンは身近に入手できる材料・道具であろう。特殊な材料・道具を必要としない点は、学習成果の追試が容易であり、学習計画を洗練させていく上でも重要と思われる。

以下、筆者による教育実践のうち、古記録・古文書に関わるものを一つずつ紹介する。

## 二 古記録に関する教育の実践

学習名…「日記から1000年前を体感してみよう！」

〔夏休み！ぶんばく京力隊講座／学芸員と挑戦〕の一元として

実施日時…平成二十四年（二〇二二）八月二十四日（金）十四時～十六時

（そのうち約十五分）

参加人数…七名（いずれも事前募集に応募した小学生）

### 前提

「夏休み！ぶんばく京力隊講座／学芸員と挑戦」は、参加者が複数の学芸員と対話し、資料の実物について多角的に学ぶことで、博物館を楽しむことを目的とした講座である。募集チラシには次のように記し、参加者と学芸員の対話が生まれることを目指した。

「ぶんばく京力隊」とは、ぶんばくのことを知りつくして、京都のまちの中で面白い文化や秘められた物語を発見したり、それをほかの人にも報告したりしてくれる、そう！例えるなら、特派員や探偵団のこと。みんなの質問や報告は、ぜひ学芸員さんたちに教えてね。

当日は、小中高生が無料で入場できる二階総合展示室内に、七人の学芸員が机等を設け、それぞれの専門性を活かした問いを用意した。参加者は自由な順序で各単元に取り組み、それぞれの回答・活動を終えるたびに、事前に配付したカードに学芸員がスタンプを捺すこととした。その中で筆者の担当した単元が「日記から1000年前を体感してみよう！」であった。

平成二十四年（2012）八月二十四日 夏休み！ ぶんばく京方録講座

## 日記から1000年前を体感してみよう！

ふじわらのみちなが

にっき てんじ

この部屋には、藤原道長という人が書いた日記を展示しています。道長は今から約10

のこ

00年前（！）の政治家でした。1000年も昔の人が書いた文字や紙が残っているのは、すくくめずらしいことなのです。

さて、みなさんも日記を書いたことがあるかと思いますが、道長の日記とみなさんの日記とでは、

ちが

似ているところや違うところがあります。じつさに書いて比べてみることで、それを体感してみましよう！！

### ●あなたの三日間の日記を、なるべくくわしく書いて下さい（約5分）

八月二十一日 仏滅

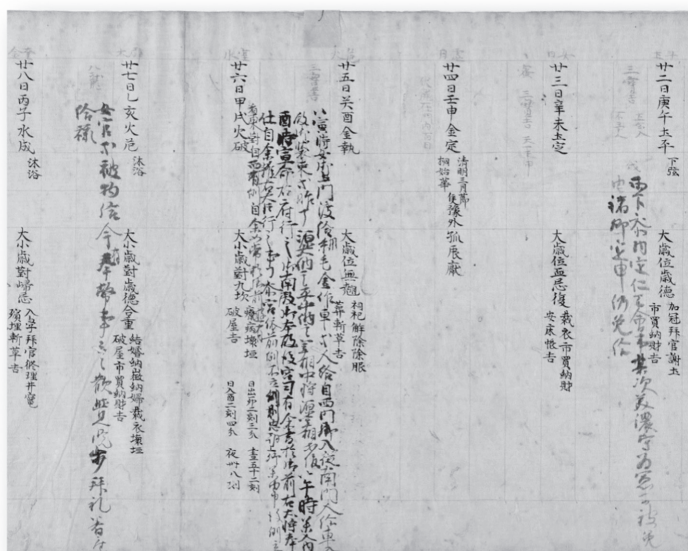
八月二十二日 大安

八月二十三日 赤口

●展示室で藤原道長の日記『御堂関白記』の「廿五日」（25日）を探して、比べてみよう！

みどうかんぱくき

国宝『御堂関白記』長保二年（1000）八月二十五日条の前後（陽明文庫所蔵）



陽明文庫編『陽明叢書御堂関白記1』（思文閣出版）より

道長は、日記を書いたり書かなかったりしています。少ししか書かない日は字を大きく書き、くわしく書く日は小さく書いています。消しゴムがないから、字の上に字を書き直したこともあります。家族や友だちのことも書いています。

みなさんの日記にも、似たところがあるのではないのでしょうか？

でも道長は、自分のことはあまり書いていません。たとえば娘がえらくなつたとき、朝何時に、どの門から建物に入ったのか、だれが出、席したのか、などを書いていきます。

このころの日記は、自分のことだけではなく、家族のイベントや世の中のニュースを書きのこすものでもありました。だから、大切にのこされてきたのです。

もつと漢字がわかるようになったら、道長の日記に何が書かれているのか、解説にチャレンジしてみてください！！



## 展示との関わり

同時期の二階総合展示室では、筆者が主担当の「陽明文庫の名宝2（天皇と関白の和歌）」が開催中であり、そこで近衛家の遠祖にあたる藤原道長（生九六六―没一〇二七）の自筆日記『御堂関白記』を展示していた。『御堂関白記』は、まとまって残る世界最古の自筆日記であり、当時の最高権力者周辺の実情に迫りうる好個の史料である。その重要性ゆえに国宝に指定され、二〇一三年にはユネスコ記憶遺産に登録された。

この千年前の日記の特徴の一つとして、具注暦に記している点が挙げられる。具注暦とは、前近代に用いられた暦の一種で、暦日の下に吉凶や禁忌等を注記した卷子本である。『御堂関白記』の場合、二行分の余白（間明き）や裏に日記を書いている。この点に注目した参加体験型学習を、以下のごとく実施した。

## 実施目的

参加者が自ら日記を書き、藤原道長の日記『御堂関白記』と比較する。それによって、

- ①平安時代の日記を身近に感じる。

②現代の日記とは少し異なる性格をも持っていたことを理解する。

## 実施内容

①具注暦に日記を書いてみよう。

\*<sup>注6</sup> 枠線を設けて日付と暦のみを記したワークシート（図1）と鉛筆を配布し、「あなたの三日間の日記を、なるべくくわしく書いて下さい」と指示する。

\*あえて消しゴムは渡さない。

\*参加者の記憶が曖昧な場合は、「晩ご飯は何を食べた？」「テレビは何を見た？」「誰と会った？」などと質問する。

②展示している『御堂関白記』の中から、八月二十五日の記事を探し、その特徴や感想を考えよう。

\*昔の人は二十を「廿」と書いた。これは「十」二つを左右に置いたものである。

\*参加者が考えあぐねていたら「墨と鉛筆の違いは何だろう？」

## 成果・所感

参加者の日記との類似点として、次の点を確認した。

①道長も日記を書いたり書かなかったりしていること。

②枠の中で、少ししか書かない日は字を大きく書き、詳しく書く日は小さく書くということ。ように、記事の量に応じて字の大きさが変わっていること。

③消しゴムがないので、字の上に字を書き直していること。相違点として、次の点を確認・説明した。

④道長は漢字のみで日記を書いていること。

⑤自分のことよりも家族のイベントや世の中のニュースを書き残していること。

三日間に特記する出来事がなく、当初はワークシートへの記入が進まなかった参加者もあったが、テレビや食事、会った人等の記憶を尋ねることで、「日常」にも変化があることに気付いたようである。実施目的①は達成できたといえよう。

成果・所感⑤については、新聞やテレビがないことを示唆しながら、相違点の理由を考えるよう問いかけた。時間が限られている中で、説明や対話の時間が十分に取れなかった点が惜しまれるが、小学生ながら、社会の出来事を文字で記録し、広範囲に伝える媒体であるという新聞の機能についての確に理解している参加者もいた点は特筆される。理解度の差はあるが、おおむね実施目的②も達成できたと判断される。

## 三 古文書に関する教育の実践

学習名…「むかしの〇お手紙体験」〔ぶんぱく子ども教室〕として

実施日時…平成二十六年（二〇一四）三月一日（土） 十四時～十六時

参加人数…六名（いずれも事前募集に応募した小学生）<sup>注7</sup>

## 前提

ぶんぱく子ども教室は、筆者の所属機関が小中学生を対象に行っている学習普及活動

の総称である。今回は、同時期の二階総合展示室で開催中の「細川家 永青文庫コレクション6 南北朝・室町時代の武家文書」に関わる教室として、同展主担当の筆者が講師をつとめた。募集チラシには、次のように記した。

昔の人みたいに、和紙と筆を使って、お手紙を書きます。「ありがとう」、「お元気ですか?」、「最近こんなことがあったよ」などなど、手紙を書いて、自分の気持ちや身のまわりの出来事を伝えるのは、今も昔も同じです。昔のお手紙の書き方を聞いて体験すれば、歴史や古文書が少し身近に感じられるようになりますよ!

## 展示との関わり

「永青文庫コレクション6」展で展示した永青文庫所蔵「細川家文書」は、南北朝・室町時代に細川家(和泉上半国守護家)が受信した文書が、その子孫にまともに残ったものであり、古文書学の主要論点である伝来・形態・様式・機能の全てについて十分な考察が可能となる文書群である。特に注目されるのは、中世における書状の筆記方法や封式が明らかとなる文書が多数存することである。

中世において書状を書く際には、例えば図2のごとく、二枚の紙を(机に置くのではなく)左手で持ち上げて、左方を巻いて筆記したことが明らかとなっている<sup>注8</sup>。この指摘は、本文が長くなった際に、一紙目は表に書き、二紙目は裏に書いている例や、一紙目に文章がおさまっても、文字を書かない二紙目(裏紙)を添えた例で補完されている<sup>注9</sup>。この二紙目の紙は無字であるため、廃棄されたり、受け取った側が再利用したりしたようで、残っていない例も多いが、細川家文書には残存しているものが複数存するのである。

また細川家文書には、文書本紙の端を切って、畳んだ文書自体を巻いた切封や、発信時に文書本紙をくるんだ懸紙が残っているものも多い。切封は千切れることも多く、懸紙は受信者側で保存のために文書を包んだ包紙とは区別されるものであり、文書の発給時の形態をよく残しているという点で貴重なものである。

今回は比較的時間に余裕があることもあり、中世における書状の筆記方法や封式に注目した参加体験型学習を、以下のごとく実施した。



『春日権現験記絵』巻五(部分)

《図2》

## 実施目的

- ①和紙と筆を用い、さらに現代とは少し異なる動作・規則を経験することで、歴史や古文書を身近に感じる。
- ②手紙の執筆という体験を通して、モノを介して意思を伝達するという行為の意味を考える。

## 実施内容

- ①開始のあいさつ。

\*「どのくらいの頻度で手紙を書く?」、「パソコン・携帯電話のメールは使う?」

- ②白紙に鉛筆で手紙を書いてみよう。

\*A4無地のコピー用紙と鉛筆・消しゴムを配布。

\*あえて指示せず、自由に。

\*「みんなの手紙にはどんなことを書いたのかな?」。親族への近況報告。友人に、また遊ぼう等。

- ③展示中の古文書二通を紹介。

\*展示室で昔の人の手書きの手紙を見る。

\*当時の人の大事なコミュニケーションの手段。我々が歴史を知るにも重要。

\*「みんなの手紙との違いは？」。漢字、くずし字、花押、縦書き、和紙、墨、切封、懸紙。  
 \*「みんなと同じところは？」。本文、署名、あて先。これらは今も昔も手紙に必要な要素。名前を書く位置は、相手に対する礼節として重要。

④自分の花押(名前を紋章化したもの)を鉛筆で作ってみよう。

\*名前の漢字をもとに、自由にデザイン。

⑤筆ペンと半紙を使って、昔の人の手紙の書き方を体験しよう。

\*筆ペンと習字用半紙を配布。さっきの鉛筆書きの手紙の文章を書く。

\*昔は左手に二枚の紙を持って左方を巻き(あるいは折り)、空中で書く。楷書よりも行書・草書の連綿(一文字一文字を区切らずに、続けて書く)の方が書きやすい。

\*二枚目の紙に何も書いていなくても、二枚一緒に畳む。現代でも便箋に手書きで手紙を書く際は、余分の(文字を書かない)便箋を添えるのが礼儀。

\*練習は何枚使ってもよい。慣れてきたら、清書する。

⑥半紙を使って昔の人の封筒を作ってみよう。

\*封筒の目的。第三者による運搬の際の秘密保持。相手への礼儀。ハガキは略式なので本体だけで出す。

\*昔は切封(手紙の端を切って巻きこむ)や懸紙(手紙とは別の紙を折って、手紙をくるむ)を施した。配付資料「切封・懸紙の図解」(図3)参照。

\*練習は何枚使ってもよい。懸紙は、慣れてきたら清書する。

⑦清書した手紙に切封・懸紙をして完成。

\*この段階で手紙を書き直しても良い。

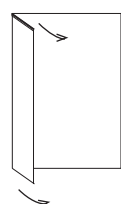
⑧おわりのあいさつ。

\*手紙と電話の違い。

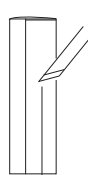
\*「現代の郵便屋さんが運ぶときに必要なものは？」。郵便番号・住所。相手を知っている本人や使者が運ぶのではなく、第三者が手紙を届けるサービスが成立している現代。

\*真心を籠めた自筆の手紙を受けたときのうれしさはメールよりも大きい。

## きりふう お 切封の折り方



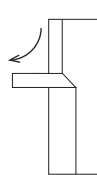
おくからたたむ



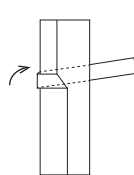
はし 端を切る  
\*中央少し上から  
横1cm程



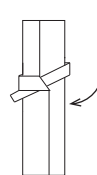
切りこみを  
真上に折る



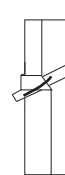
さらに切りこみを  
左に 90° 折り



うらからまわす



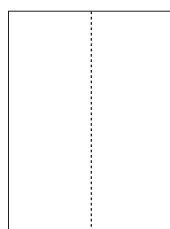
切りこみを  
折り目にさしこむ



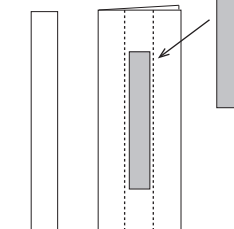
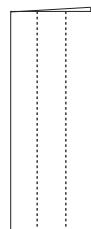
すみ 墨を引く

\*展示室ではインク・  
墨の使用は禁止です

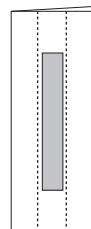
## かけがみ お 懸紙の折り方



紙を縦長にして二つ折りにし、  
さらに内側に三つ折りにする



三つ折りを開けて  
本紙を中央に置く



再び三つ折りにする



天地を折る



相手と自分の名前を書く

《図3》



## 成果・所感

文字を書く、あるいは紙を折る・切るという素朴な作業ではあるが、日常生活では体験しない作業だったためか、概して好評であった。練習の際は半紙を何枚使ってもよいとしたために、のびのびと作業し、結果的に集中できたようである。その反面、予想していたことではあるが、墨で手を汚す参加者もあり、ウェットティッシュ等の用意は必須である。

今回は、昔の行為を身近に感じるということに主眼を置いたため、家庭で容易に準備できる筆ペンと習字用半紙を準備した。今後、より本格的な体験という目的で実施するのであれば、墨汁と筆、(習字用半紙よりも)厚手で大きい和紙を準備すれば、文字のかすれや墨継ぎ、字配り等の体験も可能になると思われるが、まず実施目的①は達成したと判断される。

実施目的②についても、封筒の意味・機能や、自分および相手の名前を書く位置で礼節を表すことを説明した際に、「なるほど」という反応が複数あったので、一定程度は達成できたと判断される。

参加者が実施内容②(白紙に鉛筆で自由に手紙を書く)の作業をする際、紙使いの縦長・横長と、書式の縦書き・横書きの組合せが全て提出された。パソコンの使用が普及した今日の青年・壮年世代では、縦長の紙使いに横書きが一般化しているように思われるが、小学生はそうでもないようである。また、意外だったのは、全ての参加者が日付を書いていなかったことである。これも、スケジュールに縛られて日々を過ごす社会人と小学生の差であろうか。

実施内容⑤(手に二枚の紙を持って巻くか折り、空中で書く)では、絵巻に描かれたような姿勢、筆の持ち方で手紙を書いていた参加者も複数おり、最も自然な体の使い方が時代を越えて存在することが窺えた。

改善すべき点として、実施内容④(花押の作成)で、なかなか案が出ない参加者が多かった。自由にデザインして楽しんでほしいという意図であったが、より多くの花押の具体例を提示するなどして、参考に供した方がよかったのかもしれない。ただし、少し時間をかけると、ハートマークのように現代風の多彩な案が出た。

## 結

以上、博物館における古文書・古記録の展示と教育という観点から、近年の展示や、小学生を対象とする参加体験型学習の実践について述べてきた。

文章や手紙を書くという行為が携帯電話やパソコンのメールに代替されていくなかで、日記や文書を手で筆記し、封を施すという原初的な体験は、文献資料の理解を深めるに違いない。「昔の手紙」や「昔の日記」は、今回触れられなかったさまざまな作法や、募集する参加者の年齢等の要素を考慮して、作業過程を加除することが可能であり、昔の行為を追体験するという基本方針の参加体験型学習は、今後も継続して開催する意義がある。

集客・収益に結び付かないと思われている文献資料の展示であるが、本質的な理解への要望は確実に存する。小中学生のみならず、社会人を対象とした参加体験型学習の計画を考えることも一つの解答であろう。今後もより効果的な展示と教育のあり方を模索していきたい。

## 注

1 以下、展示につき、図録の刊行されたものは『』でくくり、図録の刊行されていないもの(A3厚紙二つ折りのカラーリーフレットを作成)は「」でくくる。

2 正式な展示名は「近衛家 王朝のみやび 陽明文庫の名宝2」であるが、以下では、「近衛家 王朝のみやび」を省略する。「天皇と関白の和歌」等の( )内の記載は、その年の展示の主題である。

3 京都府京都文化博物館総合展示『聖護院門跡の名宝―門跡と山伏の歴史―』と龍谷大学龍谷ミュージアム特別展『聖護院門跡の名宝―修験道と華麗なる障壁画―』の成果とを合わせて図録『聖護院門跡の名宝』を刊行した。

4 図録以外の関連刊行物として、『歴博』一八四(特集…中世の古文書、二〇一四年)がある。

5 担当者が同展の意図や創意工夫、数値的な記録等を整理したものとして、高橋大樹「地域博物館における古文書展示―平成二五年度企画展「湖都大津のこもんじょ学」報告―」『大津市歴史博物館研究紀要』二〇、二〇一五年）がある。同様の関心を持つ館外の者にも成果が共有できる重要な報告である。

6 \*の下には留意点や問い・活動の具体的内容を記した。以下同様。

7 中学生も募集したが、参加者はなかった。広報のあり方と合わせて、中等教育段階で関心を抱くような学習内容を考えることが課題としてある。

8 田中稔「絵巻に見える書状の書き方」(同『中世史料論考』吉川弘文館、一九九三年、初出一九九一年)。

9 田中稔「本紙・礼紙と料紙の使用法について」(同『中世史料論考』吉川弘文館、一九九三年、初出一九七六年)等。田中稔「礼紙について」(同『中世史料論考』吉川弘文館、一九九三年、初出一九八四年)も参照。

図1…当日配布のワークシートに補訂を加えた

図2…東京国立博物館所蔵模本『春日権現験記絵』卷五(続日本絵巻大成『春日権現験記絵上』中央公論社、一九八二年)。

図3…当日配布した「切封・懸紙の図解」プリント。

〔付記〕本研究はJSPS 科研費15H00015による成果の一部である。